

研究種目：基盤研究（C）（一般）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520384
 研究課題名（和文） 英語の時制と現在完了形のメカニズム及び使用原理に関する研究
 研究課題名（英文） A Study on how the English tense and the English Present Perfect Works
 研究代表者
 後藤 万里子（GOTO MARIKO）
 九州工業大学・大学院情報工学研究院・准教授
 研究者番号：20189773

研究成果の概要：英語の単純現在形、及び現在進行形、現在完了形は、いずれも現在時制の形態素の付随した時制節であり、現在成立している状態を表すという共通性を持つことを、使われる認知的及び語用論的環境や、意味や用法の全てを統御する現在時制の形態素の意味機能の観点から、網羅的に説明した。例えば現在完了形は、過去分詞の表す過去の出来事を表すように一般的には捉えられているが、実は、過去分詞の表す出来事に影響を受けた「現在の事柄」を表すと考えると文法的制約を説明できることを示した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	570,000	3,070,000

研究分野：認知言語学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：英語の時制、認知言語学、意味論、語用論、アスペクト、モダリティ

1. 研究開始当初の背景

英語の時制は、今日世界の事実上の共通語として機能する言語の極基本的な文法項目として、研究し尽くされてきたかに見えて、曖昧模糊としていることばかりであった。例えば、英文法がその歴史上、ルネッサンス期に欧州でラテン語やフランス語文法が体系化された流れを受け、それらを範として体系化が進められた為か、英語には時制の形態素としては現在と過去の二つしかないにも関わらず、未来を含めた三時制が想定される等、

ごく最近までズレがあった。昨今では英語の時制と言えるものは、二つしかないという見解はかなり浸透して来たものの、例えば、現在完了形は、まぎれもなく時制節であり時制の形態素としては現在時制のものしか付随していないにも関わらず、過去表現の一種と見なされ、それなのに yesterday 等の時間副詞と共起しない事実があるなど、分析や説明が最も困難な構文の一種とされてきた。また、単純過去と区別するために current relevance 等といった概念が使われてきたが、

その輪郭も不明確であった。例えば、英語の時制機能に関する多くの先行研究の中でも最も貢献度の高い Langacker (1991) でも、完了形の場合のみ、時制は参照点を示すとされ、その理由を含め様々な点が曖昧なままである。説明ができないという点は、単純現在形や現在進行形の場合でも同様で、いずれの形式も、出来事が過去や未来にあることを表したり、時制が意味を持たない場合もあると説明されたりしてきた。歴史的現在や遂行文等も含めた、様々な単純現在形の実際の用法や現象が、包括的に説明されることはそれまでなく、様々な問題を呈して来た。現在進行形にしても、近接未来等を表すこともあるなどと説明されている。それは、時制現象の説明に必要なアスペクトに関する概念、時制とアスペクト概念との関係、実は常に同時に働いている法性との関係等、記述上に必要不可欠な概念的道具立てや、過去分詞や現在分詞の意味機能、be (助) 動詞、have (助) 動詞、それらの組み合わせで構文として働く場合の仕組みなどについて理論的・体系的説明力のある枠組みが不在または曖昧であったためでもある。これらが混然として時制研究の大きな障害となっていた。

筆者はそれまで、Lagnacker がその一連の研究において提唱してきた認知文法の枠組みにおける時制や Harder (1996) の時制論にヒントを得て、時制に関する個別現象を一つ一つ取り組んできた。平成 15-17 年度における基盤研究 (C)、「欧州諸言語完了形の共時的・通時的環境における英語現在完了形の位置付けに関する研究 (研究経費総額 190 万円)」において、英語及び欧州諸語特に特に欧州北部諸言語における現在完了形の意味機能及び諸現象を、通時的・及び共時的に捉える研究を行った。様々な文献の中でも特に Drinka (2003) に注目し、彼女の、(1) 欧州西側に偏在する世界の言語の中では特異な HAVE 完了形は、ギリシャ語に端を発しラテン語及びその後のロマンス諸語やゲルマン系言語に受け継がれ広がった背景と、(2) 意味の過去化は、12 世紀のフランスの口語表現として始まり、欧州中央に文化の伝播と共に広がったが局地的な変化でもあるとする主張を、特に現代の欧州北部の諸言語や方言における現在完了形の振る舞いを調べる事によって、敷衍し、欧州諸言語の現在完了形における英語の完了形の位置づけと特性を明らかにした。即ち、最も過去化の進んだフランス語では、have の意味を持つ動詞+過去分詞の連鎖が過去を意味する口語表現となっているが、そこから離れるに従って、過去の意味は少しずつ弱くなり、ノルウェー後では英語と殆ど近いほど弱く、欧州諸語における現在完了形の意味の過去化という変化の影響の外側にあったことが見て取れる。これによ

り、英語内部の現象を見ているだけでは得ることの出来なかった知見を得て、現在完了形の外堀を固め、本研究は始まった。すなわち、英語の完了形における時制形態素は、現代でも形骸化することなく機能しているとみる事によって、説明上の多くの困難や矛盾を少なくする事ができた。

2. 研究の目的

本研究は、これまで問題となって来た様々な時制に関する現象を網羅的に扱い、現在時制の形態素を有する、単純現在形・現在進行形・現在完了形を含む、時制節単文全てに存在する一貫した性質や原理を見極め、かつ、時制の形態素 (±past) の意味的働きとアスペクトとの関係や法助動詞の有無によって表されるモダリティ (現実実現しているか否か) との組み合わせによって表される意義などを明らかにすることによって、現在完了形における現在時制の形態素の意義も説明できることを示すこと、及び現在完了形の意味機能や振る舞いを説明できる原理を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 時制のメカニズムを捉える鍵を Langacker (1987, 1991) 以来、認知文法において精緻化されて来た動詞の aspect を二つに大別する、「時間の流れにおいて変化が意識される perfective と意識されない imperfective」、という概念区分や modality 観 (法助動詞を伴わない時制節 [non-modal]) であることにも、主動詞で表された出来事が既に現実に生起している等といった意味がある等) を採用することによって捉えた。

(2) 認知文法の、語と言語使用の背後にある主体の知識や認識、環境の相互関係、言葉の形式 (音)・意味・運用を融合させた視点から言語の構造や仕組みを捉えて、形式と意味機能の呼応関係を理論的に体系化する枠組みにおける概念的道具立てを用い、問題となって来た個々の事例を網羅的に扱い、分析した。具体的な言語事例間には、絶対的な境界線を引くことは不可能な形で規則性と慣用性が存在し、ある形式の周辺の現象にもその形式の持つ本質が現れたり、一見したところ安定している様に見える記号系もダイナミックに変化していたりする為である。従って、言語の有様を動機付ける要素として共時的な要素や通時的な変化も分析の際に考慮に入れた。

(3) 言語表現を、話し手が世界の一面を、聞き手と話し手が、或る意図やそれまでの経緯や世界に関する或る共有知識を持つと

いう、ある使用の場で、ある捉え方 (construal)のもとに把握した結果として、即ち、ありのままの世界というよりは、われわれの認知活動によって構築されたものとして捉えるという点を重要視し、語用論で研究されてきた、文脈や談話を考慮した観点からの文の意味の処理を認知言語学の中に取り込んだ。

(4) 英語の現在時制形態素の意味機能に焦点を定め、現在という一瞬で全体像が捉えられる事態というのは、imperfective な事態でしかあり得ないという事実を重要視した。

(5) 時制節 (又は単文) を時制の形態素とその他の要素に分けるという Harder (1996) の時制機能を捉える手法を取り入れ、かつ動詞が be + V-ing 或いは Have+過去分詞のように複合的である場合も、個々の構成素と、まとめ全体、それぞれの意味機能を個別に分析することにより、何が文全体のアスペクトや意味を文法的に支配しているかを見極めた。

4. 研究成果

(1) 時制の機能は、動詞の表す出来事の生起位置ではなく、「時制節全体で表される意味内容の成立時点を確認するよう指示するべく機能する」という Harder (1996) の説が、彼が自身の説で説明した単純現在の一部の例だけでなく、全ての時制節を説明できることを論証した。その為、時制の形態素の機能、法助動詞の機能、それ以外の節の内容との関係や節全体における相互作用を明らかにした。また、英語の現在時制の形態素は話者の事態認知が完了する瞬間点で節内容が成立していることを表すとした上で、だからこそ現在時制で表現される事態は imperfective なものでしかありえないことを証明し、現在時制の形態素の付随する全ての時制節の使われ方や意味機能を統一的に説明できることを示した。同時に、完了形の場合も例外的に扱う必要もなく、これまで談話の問題としてとされてきた例外として扱われ、談話の性質とどのように時制が作用しあっているかが議論されることのなかった歴史的現在や現在時制の遂行文等を含む、問題となってきた現在時制諸現象も包括的に捉え説明できる様になった。

(2) 現在完了形の説明において、定義もその正体や仕組みも曖昧なまま常に使われ続け、問題となってきた Current Relevance という概念の正体を明らかにする事ができた。Current Relevance は「単純過去形との表す出来事とは異なり、過去分詞の出来事が現在に関係する」といった意味で現在完了形だけが固有に持つ特性を示す為に使われ、一見説

明として成り立っているかのような印象を与えて来た。だが、単純過去形の文であれ何であれ、通常の文は現在の談話と関係があり、現在完了形だけが持つ Current Relevance とはどういうことか明確に示した研究は存在しなかった。本研究では、HAVE の意味的な主語は、発話者であり、発話者が、過去分詞で表された出来事の影響として現在の状態のある側面を表現したものが、現在完了形であると論じた。従って Current Relevance というのは、「話者が表現したい現在の状態を、聞き手と共有する文脈において、過去分詞で表された出来事に何らかの影響を受けたものとして見ている」という意味で関連があることを表している、

(3) 単純現在形は、基本的に物事の性質や静的な情景・一般性、規則性、物事のあり様、構成などを説明する機能を果たしており、要約・論説・年表・写真説明等に動作動詞の単純現在が用いられるのは、表される意味内容が「imperfective に存在し、かつ現在の一瞬でも成立していると認識される」からであり、歴史的現在と呼ばれる現象も、上記のいずれか、または過去のエピソードの構成や順序を説明するものであり、例外的に見える遂行文の単純現在も、実は、話者の補文内容に対する社会的関係や態度という imperfective な事態を表明する文だと見なせることが明らかとなった。

(4) 進行形構文は現在分詞で表された perfective な出来事の途中状態にあり続けるという点で imperfective であり、現在進行形は、その途中の一点に現在があるということを表すとみる事により、進行形の様々な事例、近接未来やイライラを表すとされて来た例や、be going to 構文との関係も説明できる事を示した。また、それが英語の進行形という、cross-linguistic にみても、通時的にも共時的にみても非常に独特な構文の由来とも整合性が取れる事を示した。

(5) 現在完了形が過去表現の一種と見なされた理由には、①欧州中央を中心とする国々の言語に於ける Have+過去分詞の構文の意味が 12 世紀から過去化する変化を起こした為、②出来事の生起は人間にとって重要であり、過去分詞は修飾対象を出来事の生起の結果状態にあるという形で修飾するという特性を持つので、現在の状態を現在までというスパンでその出来事をみた表現に用いられ、③真の主たる意味である現在の状態は、文脈からしか判らない性質のものであること、等が挙げられる。だが、④英語は①の変化のうねりの外側にあったという研究を裏付け、⑤過去分詞はあくまで脇役であることを様々

な文法現象や制約の理由として浮上させ、⑥文脈との関係においてはじめて意味が明確になるという性質を明らかにした。そのことによって、英語教育のあり方に資する方針が打ち出せた。既に一部の文法書で取り入れられている。

(6) 英語で未来を表現する場合に主に用いられる will 等の法助動詞を伴った表現、be going to、進行形、単純現在形、のそれぞれが、本質的には何をどう表しており、どう異なっているか、どう使い分けられているかについて、文脈などを使って明らかにすることができた。

(7) (4) と (5) を組み合わせることによって、従来曖昧であった、現在完了進行形と単なる現在完了形の共通性と相違を説明することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者の戸籍名は後藤万里子、学術活動におけるペンネームは樋口万里子 (Mariko Goto Higuchi))

[雑誌論文] (計 6 件)

①樋口万里子、英語の進行形構文の謎、九州工業大学情報工学部紀要 (人文・社会科学編)、第 22 号、19-50、(2009)、査読無

② Mariko Goto Higuchi, “The Semantic Structure of the English Present Perfect Progressive,” Proceedings of the Ninth Annual Meeting of the Japanese Cognitive Linguistics Association JCLA 9, 457-467、(2009)、査読有

③樋口万里子、「認知言語学からみた歴史言語学」、『月刊言語』、2009 年 2 月号 Vol. 38.No. 2、50-57、(2009) 査読無

④樋口万里子、英語の現在完了形の時制の意味機能、Proceedings of the Seventh Annual Meeting of the Japanese Cognitive Linguistics Association JCLA 7, 457-467、(2007)、査読有

⑤HIGUCHI, Mariko, “The Aspectual Value of the English Simple Present and Performative Sentences,” 九州工業大学情報工学部紀要 (人文・社会科学編)、第 20 号、31-81、(2007)、査読無

⑥樋口万里子、「語り」の現在形、九州工業大学情報工学部紀要 (人文・社会科学編)、第 19 号、19-50、(2006)、査読無

[学会発表] (計 5 件)

①Mariko Goto Higuchi, “The Semantic Structure of the English Present Perfect Progressive,” The 9th Japanese Cognitive Linguistics Conference, September

13-14, 2008, Nagoya University, Nagoya.

② Mariko Goto Higuchi, “The Semantic Structure of the English Present Perfect Progressive,” The 19th Fukuoka Cognitive Linguistics Conference, September 8th, 2008, Fukuoka: Seinan Gakuin University.

③Mariko Goto Higuchi, “Why Performatives are in the Simple Present Tense,” the 10th International Cognitive Linguistics Conference, July 15-20, 2007, Krakow, Poland: The Jagiellonian University.

④樋口万里子、「英語の現在完了形の時制の意味機能」、日本認知言語学会第 7 回大会、2006 年 9 月 24 日、京都：京都教育大学。

⑤樋口万里子、「英語の現在完了形の時制の意味機能」、第 16 回福岡認知言語学会、2006 年 8 月 30 日、福岡：西南学院大学。

[図書] (計 2 件)

① 樋口万里子、ひつじ書房、「英語の未来表現-認知文法の観点から」『認知言語学論考』STUDIES IN COGNITIVE LINGUISTICS No. 7, 2007 山梨正明他編、2008 年 9 月 9 日発行 (1-44)

② Mariko Higuchi Goto, The Semantic Function of the English Present Tense Morpheme, 2008 年 3 月、博士論文、九州大学 (総ページ数 : 319)

[その他] (計 2 件)

書評 その他

①(2008) A Review on Mental Spaces in Grammar: Conditional Constructions by Barbara Dancygier and Eve Sweetser: *Studies in English Literature*, English Number, pp. 200-206.

②(2007) Deontic から Epistemic への普遍性と相対性- モダリティの日英語対照研究 黒滝真理子著の書評、言語圏 α ことばの書架 月刊言語、p. 121、大修館・東京。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

後藤 万里子 (GOTO MARIKO)

九州工業大学・大学院情報工学研究院・准教授

研究者番号: 20189773

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし